



岡村病院  
院内報

# 歩 (あゆみ)

第 59 号

発行 岡村病院  
編集 歩(あゆみ)  
編集委員会  
平成22年11月1日

## 岡村病院 基本理念

私たちは、患者様本位を第一に考え  
高度な専門医療技術をもって  
地域社会に貢献することを目指します。



芙蓉の花： 楚々として艶麗な姿より、美女に例えられます。  
高松内科クリニック院長 高松 和永 先生 撮影

## 今月のことば

## 「ありがとう」と言われるように、言うように

「ありがとう」という言葉は、誰にとっても言われると気持ちのよい言葉です。そして言った方も幸せな気持ちになります。みんなをこころよくしてくれる「魔法の言葉」です。

私は若い時、誰からか教えて頂いた「ありがとうと言われるように、言うように」という言葉が心の中に残っていて、時々思い出します。

ところが、最近読んだ本の中に次のような話が出ておりました。

「或るお寺の住職の方が『ありがとうと言われるように、言うように』と印刷したポスターを檀家の皆さんに配ったそうです。すると数ヵ月後に、嫁姑の不仲が解消されたという人が出来た。』」というのです。

それは、ある檀家のご近所に住む老婦人がそのポ

スターが気に入って、もらって行きました。そして自分の家のお嫁さんがよく見えるような所にそのポスターを貼りました。そして自分も毎日そのポスターを見ていました。そうしたら、そのうちに老婦人のほうの小言がだんだん少なくなってゆき、お嫁さんもお姑さんにやさしく接するようになって、今は仲良く暮らしている。というのです。

一日に10回、声に出して「ありがとう」と言う習慣をつけると、あなたの廻りに必ずよい事が起こる、と言っている人があります。

ともかく「ありがとう」は言っても言われても、みんなを幸せにするすばらしい言葉です。

毎日の生活の中で「ありがとうと言われるように、言うように」頑張りましょう。

## 「心あたたかな病院」

院長 岡村 高雄



最近は病院に関する報道、テレビ番組等が多く見うけられ、特にカリスマ医師、神の手を持つ外科医が多くの人々の関心を集め、更に多くの病院ランキングの本が売り出されています。

テレビで報道される医師は全ての手術が成功するように思われ、他の医師より遥かに高度な技術を有しており、治療を受ける側としては、是非この病院の先生、この病院で治療を受けたいと思わせます。更に万一、患者さまが他の病院で手術を受けても、病気が良くならなかった場合は、他の名医の治療を受ければこのようにならなかったのではないかと、疑念を抱くことや、手術ミスではないかと裁判になる可能性も出てくると思います。このような名医の紹介の一方で、最近が高知出身の村田幸先生が出版されました『「スーパー名医」が医療を壊す』のような逆の本も出版されるようになっていきます。

小生も以前に一緒に仕事をしてきた先生がテレビで神の手を持つ医師として紹介されている事を知っていますし、その先生とも時にお会いし、食事をしたりする事もあります。又、学会等でお話をする機会がある数人の先生もよくテレビでお目にかかります。小生が知っているこれらの先生方は立派な先生である事は間違いありませんが、一方では完璧な人間という訳ではなく、その他の多くの立派な先生方と変わらない方も多くあります。又、マスコミには出なくても、名医と言われている先生方より腕の良い先生に数多くお目にかかります。

更に、ランキングで手術件数が多い事が

良い病院の一番の条件に挙げられていますが、必ずしもこれだけで良い病院が決まるとは思いません。私どもの病院でも血管拡張術の症例数では多分、四国で現在一番多くの手術をしていると思っていますが、手術の数の多さでのみ論議する事は間違っていると思います。病院の設備、構造、機能、手術数、治療成績は大切な要素ではありますが、最も評価が困難な「心やさしい病院」「心あたたかな病院」が最終的には一番大事ではないかと思っています。

医療における医師の役割はある意味で絶大なところがあります。しかし、一方では医師のみでは医療は成立しませんし、医師の技術力のみでは多くの患者さまに満足を得る事は出来ないと思います。優しい看護師さんや事務員さん、理学療法士さん等病院で働く全ての職員が心優しく患者さまに接し、医師が病院の全てであると考えるような自惚れを排除し、常に謙虚に学ぶ事が患者さまに対して良い病院の条件になると思います。

「心あたたかな病院」は長い闘病生活の末に旅立たれた作家の故・遠藤周作先生が提唱され、闘病中に新聞にお書きになった言葉です。

最近のテレビ、マスコミの名医報道が過熱する一方で本当に大切な医療とは何か。「心やさしい医療」「心あたたかな病院」とは何かをもう一度よく考え、真摯に医療に向かう事が大切だと思いますし、患者さまもマスコミ報道のみに惑わされず、確固たる信念で病気に対峙して欲しいと思っています。

## 食道がんについて

消化器内科医長 植村 信隆



以前より芸能人が食道がんになったニュースが時々ありましたが、今回サザンオールスターズの桑田佳祐さんが食道がんで手術されたことで注目をあびることとなりました。それ以前にも藤田まことさん、赤塚不二夫さん立川談志さんなどがこの病気になったことを発表しておられます。

では食道がんはどんな人になりやすいのでしょうか。第一にタバコを吸う人、次にお酒をよく飲む人があげられます。高知ではタバコもお酒も両方たしなむ方が多くみられますが、その中でも特に注意しないといけないグループがあります。

男性でも50歳以上、お酒を飲むと顔が赤くなる人です。男性の食道がんは女性の6倍の人数がいます。またお酒をのんで顔が赤くなるひとはお酒を分解する途中で体内でできる「アセトアルデヒド」という毒物によって食道が痛めつけられて、場合によっては食道がんになりやすい危険度が約70倍になります。

食道がんは治療が難しい病気です。タバコ・お酒を飲む方は特に50歳を過ぎたら定期的に内視鏡（胃カメラ）の検診を受けるようにしてください。バリウム透視ではわかりにくく内視鏡でも早期には見えにくいがん

です。タバコをやめお酒も控えるようにしましょう。

タバコは百害あって一利なしです。ニコチンはくせになる力が強く、ヘロインやコカインといった麻薬と同じくらい習慣性があります。またタバコにまつわるがんも肺がんだけでなくたくさんあります。

じつはお酒で顔が赤くなる人は他のがん（肝臓がん）にもなりやすいことがわかっています。顔が赤くなるのはアルコールを分解する力が弱く、アセトアルデヒドがたまりやすいのです。「酒を飲むうちに鍛えられて飲めるようになった」といっても肝臓が強くなったわけではありません。アセトアルデヒドもニコチン、タールも強い発がん物質です。

これからの人生を元気で過ごすためにも、禁煙をし、お酒はたしなむ程度を心がけましょう。



先日、8月の猛暑の中、土佐市の高岡で毎年行われている大綱祭りに参加しました。参加したと言っても、綱引きをしたのではなく、臨床検査技師会の健康福祉事業として参加しました。生ビールや焼きそば、たこ焼きなどの出店（でみせ）と軒を並べこちらは健康事業。なんとも不釣り合いを感じながら、テントの中は40℃をさしている温度計を横目に肺機能や骨密度の検査をしました。もちろん無料で、地元の病院の看護師さんが、血圧や体脂肪などの検査もしていて、最後は医師からの結果説明もあるとあって、炎天下3時から夜8時までの間にこの出店（？）に来てくれた方は約150人へのぼりました。この歴史あるお祭りでの健康福祉事業はかれこれ10年近くやっていて、常連さんも多いようで、時間経過と共に、酔っ払った方も多かったのですが、改めて健康への関心の高さを実感しました。

さて、日常、臨床検査技師としては、もっぱら半日以上はエコー室にこもって患者さまのエコー検査をしています。足の痛みや症状があると、足の動脈や静脈のエコー。胸の違和感や痛み、また心電図異常などの患者さまには心臓エコー。動脈硬化や脳血流の心配な方は、頸動脈エコー。そして、最近では肝臓や胆嚢、膵臓、腎臓、脾臓などを見る腹部エコーも始めました。

エコー検査は、痛みや被爆などの心配がなく、繰り返し検査が可能で、リアルタイムに画像が見られる大変優れたものの検査です。なので、気になることがあれば直ぐに担当医にエコー室に来てもらい、確認していただけますし、更に精査の為にCT検査等へと進めることができます。

血液検査などの多種多様な検査業務の中で、エコー検査は患者さまと1対1で向き合い、個人の技量で血管に違いが出る可能性もある緊張の業務です。患者さまによっては、超音波が見えづらく少し検査時間が長くかかったり、思わず力が入り痛みを感じさせたりした苦い経験もあります。日々、患者さまに成長させていただいていることに感謝しながら、少しでも早く正確な検査ができるようにと、技術に磨きをかけるよう心がけています。

そして、何か普段と様子が違ったり、以前にエコー検査で定期的な経過観察を医師から勧められている患者さんが、冒頭のお祭りでの出店（健康福祉事業）のようにはいかないにしろ、「またチョットあのエコーのお姉さんに見てもらいたい」と気軽に病院に足を運んでいただけた時に、私のエコー職人としての道を照らしてくれる光になると考えます。



# 俳句

合掌の時に過路が杖離す

膝まづく時も過路の胸に杖

遠眼には白一点の冬過路

げんげ田の大風呂敷に腰下ろす

浦戸大橋天女水着で降りて来る

中村 一生

花オクラ月の雫と知らざりき

掌にとれば黒き花びら野火の屑

渚ゆく龍馬の影や涼新た

見はるかす空の碧さや鷹渡る

土佐湾の陽に光りつつ鷹渡る

浅川 たか子



蒼天へ声の消えゆく松手入

螢火のもつれつつ闇深まりし

標本の蝶に南の空の青

看護師の足音遠のく夜寒かな

いわし雲病得てより美しく

門田 俊一郎

帰省子の言葉少なくやさしかり

退院の明日を語るアイステイ

献血を呼びかけられし町残暑

彼方より稲扱く香り散歩道

汗消えてゆく風のあり無人駅

八木 素子



ふと手にした「あゆみ」の頁をめくるうち、「術ありて 後に学あり 術なくて 咲きたる学の 花のはかなさ」という歌に出合って私は驚喜しました。

これは1900年高知に生まれ1980年現職で亡くなられた大塚敬節という方で、医者の方に生まれ、西洋医学を修め、やがて漢方に魅せられて、日本におけるその道の草分けとして生涯を捧げられたのです。このことを「あゆみ」に紹介された先生は、漢方のみならず、広く東洋医学を視野に入れられこれからの医術の道を展望しておられ、私はうれしくなりました。

5年前、87才の時、私は心筋梗塞で病院にかつぎこまれ、有難いことに命を助けてい

ただいた者です。現在は2ヶ月に一度通院して診ていただき、血圧の薬をいただいております。また、私にとって教会の礼拝と、お祈りの会に出席して、神様の祝福をいただき1週間をすごします。そして週に一度、整体院で治療してもらい、体の調子を整えています。おかげ様で今夏の猛暑にも負けず、心身共に健やかで乗り切ることが出来ました。

私の家は早寝早起きで、5時には起きて聖書を読み、6時から7時頃まで畑に出ています。そこには白菜、大根、人参、かぶ、ホウレン草が青々とたくましく成長しております。

本当に奇跡としか言いようのない今日この頃の生活を感謝し、たのしく生きております。

## 「誰かが困っていたら」

4階看護助手 小田志帆子

去年の冬、改めて人の優しさというものに感謝する出来事がありました。

私がまだ勉強の為、学校に通っていた時の話です。その頃私は毎日伊野駅から汽車に乗り、高知の学校まで通っていました。その日は朝から妙に身体が重かったのですが、その時は疲れが原因だろうと思い、特に気にしていませんでした。夕方、授業が終わって帰ろうとした時、急な吐き気と頭痛に襲われました。風邪だ、と今更気付きましたが、このままでは汽車に遅れると思い、なんとか高知駅まで歩き汽車に乗りました。そこまでは良かったのですが、伊野駅に着いて椅子に座ったとたん吐き気に負けてその場にもどしてしまいました。

駅内の休憩所は汚く散らかり、早く片付けないと、と焦りながら立ち上がる事も出来ず恥ずかしさと情けなさでいっぱいになりました。

その時、駅に入って来た女の人と学生らしき娘さんが、何も言わず二人で床を掃除してくれました。私の手が汚れているのを見てティッシュで拭いてくれた上、ペットボトルの水まで手渡してくれました。『迷惑をかけて、本当にすみません』と私が言うと二人は笑って、『大丈夫、困った時はお互い様だから』と答えてくれました。

女の方は娘さんのお見送りに来ていたらしく、娘さんは時間の汽車が来ると手を振って帰っていきました。そして女の方は心

配だからと私を家まで送ってくれました。すっかり暗くなった帰り道で、色々な事を話してくれましたが、一番印象に残った言葉は、『私に何か返そうなんて思わなくていいから、いつか誰かが困っているところを見たら、今度は貴方が何かしてあげなさい』という言葉でした。

結局、あれだけお世話になったにも関わらず、その人が誰であったのか分からず、何もお礼も出来ず今日に至っています。“早く元気になってね”と優しく見送ってくれ

た言葉が今も耳に残っています。

近年、人のつながりが薄れる淋しい時代が来たと言われていますが、その中で、こんなにあたたかく接してくれる方がいるのだと思うと、本当に嬉しくなります。何もできないままお別れすることになってしまったあの時の方に、この場を借りて感謝の気持ちを申し上げたいと思います。本当にお世話になりました。どうも有難うございます。そして最後に。“誰かが困っていたら助ける”気持ちを当たり前で持つよう、私も心がけていきたいと思っています。

## 「4 階病棟に勤務して」

4 階准看護師 川村 紗代

こちらの病院で勤務して2ヶ月になります。病院での経験はありますが循環器や整形外科の勤務経験はなく、新たな気持ちで働いています。

受け持ち看護体制で患者様を担当しますが、患者様の状態や病名でお顔とお名前が一致しない事もありますが、業務を行う中で覚えていく事ができています。検査や手術もあり覚える事は多いですが、勉強になると

思います。今は知識も技術も勉強不足ですし教えられる事も多々あります。早く覚えたいと焦りもありますが、患者様相手ですのでミスのないよう自分なりに焦らず働いていけたらと思っています。

これからも勤務していくなかで知識を増やしていきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

## 「5 年後に向けて」

医事課 福田 奈那

龍馬伝も終盤に差し掛かかり盛り上がりを見せるなか久しぶりに友人と桂浜にある高知県立坂本龍馬記念館に行ってきました。そこでまず驚いたのが人の多さ。以前何度か来たことはあったのですが今までにない人の入りようで決して広くはない記念館の中は、まさに人、人、人で溢れ返っていました。また県外からの方も多く、駐車場に

ある車のナンバーを見ると岡山、神戸、大阪、三重、名古屋、大分など県外からの方がたくさん来ていました。

友人と「すごいっばいやね。けど高知県民としてはなんか嬉しいねぇ。」などと話しながらまずは下の階へ。そこには龍馬の人物が滲み出ている手紙がたくさんありました。家族にあてた手紙や同志に送った手紙。



ちょっと大風呂敷を広げてみたり、憤慨したり、相手を気遣ったり。彼の書く手紙は本当にいきいきとしていて何度読んでもワクワクしたり、ジンとしたり…。等身大の龍馬に触れて気持ちがほっこりした後は企画展が行われている上の階へ。

そこにはすったもんだの末再展示された龍馬とお龍が使ったものと同じ種類のピストルが。思っていたよりも意外と小さく、お龍の使ったサイズのピストルやったら扱えるかも、などと思いながら鑑賞。そして同じところで行われていた幕末の志士たちの手紙や毛筆の掛け軸の展示を鑑賞。西郷隆盛の書いた字はイメージ通り丸くふくよかでどっしりとした温かみのある文字。高杉晋作の字は流れるような美しい文字。桂小五郎の字は真面目さが伝わってくるような実直な文字。私の勝手なイメージにですがぴったりと合った文字ばかりで驚くと共に字は体をあらわすとはこのことか、と思

わされたひとときでした。

そして今回一番驚いたのが（何をいまさらと言われそうですが…）改めて坂本龍馬の歩んだ足跡を見的过程中で彼が土佐を脱藩してから暗殺されるまで数々のことを行っているのですが、その間約5年しかないということです。若くして亡くなってしまっただけに本当に惜しい、とは思っていたのですが、その惜しいと思わされるような仕事をたった5年間でやり遂げていたということに今更ながら驚きました。そして自分と比較するのは何ともおこがましいのですが…自分が5年前からどれだけ変わり成長できているかと考えたときにこれといって特に変わらず成長できていない自分に気づき、愕然とする。と共にこれからは5年後少しは成長したなと思えるように一日一日大切に生きていきたいと郷土の偉大な先輩の生き方に触れて感じました。

## 院内にPACS（画像保存通信システム）が導入されました

9月6日より、院内にPACS（画像保存通信システム）が導入されました。

これは、今までレントゲンやCTなど、フィルムで提供していたものを、フィルムのかわりにデジタルデータとして保存するシステムです。これに伴い、フィルムを見て診断していた今までとは状況ががらりと変わりました。



フィルムをあちこちに運ぶことも無くなったため、放射線科からの画像提供がよりスピーディーに、フィルムよりもさらに詳細な画像提供が可能となりました。

そして、診察室やナースステーションなどに置かれた大きなモニターで胸部写真やCT画像、血管造影写真などをいつでも見ることができ、加えて過去画像との比較や他院よりCDなどで持ってきていただいた画像などもモニターで診断することができるようになりました。

これにより、院内スタッフが情報を共有して手術や検査に携わることができるようになり、より充実したチーム医療にむけて努力していけることと思います。



## 「東へ、西へ、健康講座」

昨年度、大好評のうちに終了した高知市での岡村病院健康講座「足の痛みは万病のもと」。多いときで300名を超える参加者をいただきました。閉塞性動脈硬化症という病気にならないための予防方法を「知る」ことや、なってからの検査や手術を「理解する」ことを、沢山の方々がこんなに熱心に学んでくださることがとても嬉しく、職員の毎日の診療にも非常に励みになったことは言うまでもありません。



そして、毎日「痛い」を抱えてこられる患者さまも、高知市内だけではなく、いつの間にか室戸や安芸、四万十市のほうからわざわざお見えになる方も増えてきました。

「次は安芸や四万十市でやろう。遠くから来てくださる患者さまの足取りを今度はこちらから訪ねてみようじゃないか。」

今年のはじめに院長の鶴の一声で始まったこの企画も、すでに安芸市で2回、続いて四万十市でも開催させていただき、秋も深まりつつある中、とうとう四万十市での最終講座をも無事に終了することができました。

老化や生活習慣の乱れ、高血圧、高脂血症、煙草を吸う…そんな方は、いつしか足の動脈が狭くなったり詰まったりして血液が通りにくくなり、動脈硬化に陥りやすくなります。

足の痛みといえど、時に「命にかかわる」場合だってある、そんな状態になる前にご自宅でご自分で今の状態に気づくことができるように…そんな思いをこめたフットケアのお話や、いざ検査や治療を受けなければならなくなったとき、何をどう調べて治療をすすめていくのか。病気に対する、今後に対する不安や疑問を一気に解消する講座でした。

「自分の体に興味を持つこと」そして「知る」ことは、病気に立ち向かい、さらに共存する上でとても大きな力となります。

毎日過ごす病院を飛び出して、スタッフ一同列車に揺られながら東へ西へおよそ2時間。…遠くへ来たなあと思ひながら、まずはお昼を食べようと食堂に入ると川エビや青のりの天ぷらが“日常”の顔をして出迎えてくれました。こんな遠い距離をわざわざ診療を受けに来てくださっている患者さまがいるんだな、そう思えて身の引き締まる思いがします。

安芸市ではのべ175名の方々においでいただき、にぎやかに開催できました。四万十市での最終日は残念ながらどしゃぶりの大雨。足元を心配いたしましたでしたが、外の天気など文字通りどこふく風と熱心に聞いていただき、白熱した質疑応答がなされる中、無事に講座を終了することができました。準備の不手際もあり申し訳なく思うことも多々ありましたが、前に乗り出して説明を聞き、メモをとり、一緒にフットケアの練習をし、と皆さまが一生懸命に聞いて勉強



してくださる姿はとてもうれしく思いました。

これからますます寒くなり、血管にとっても「つらい季節」がやってきます。講座での知識を毎日に役立ててくださることで、皆さんの日常生活になんらかの嬉しい変化、きっかけが起こることを心から願ってやみません。ご参加下さいました皆様、本当にありがとうございました。

## ● ニューフェイス ●



依 光 恵 子 さん  
リハビリ助手  
趣味：ダンス、旅行



松 木 はるよ さん  
臨床検査技士  
趣味：ドラマ鑑賞



小 田 志帆子 さん  
4階病棟看護助手  
趣味：読書



川 村 紗 代 さん  
4階病棟看護師  
趣味：音楽鑑賞



松 島 省 三 さん  
事務  
趣味：海関係



藤 岡 紀美子 さん  
理学療法士  
趣味：映画鑑賞



よろしくお願いします。